

真宗大谷派 光福寺 川西市笹部二丁目十六ー十六

令和八年 八月発行 TEL ○七二ー七九四ー〇一八九

【三蔵法師（さんぞうほうし）】

孫悟空を主人公とする『西遊記』は、テレビドラマやマンガになるほど日本人にもなじみの深い物語であるが、この『西遊記』に登場する三蔵法師、「三蔵」というのを、僧侶の名前だろうと思っている方がおられるかもしれないが、これは決して名詞などではない。歴史上、三蔵法師は決して『西遊記』の三蔵一人ではない。そもそも「蔵」とは、サンスクリット語の「ピタカ」の漢語訳で、仏教に関するさまざまな文献の「集大成」を意味する。「三」というのは、それらの文献を「経（釈尊の教え）・律（僧や教団が守るべき戒律）・論（経や律蔵の注釈書）」の三種に分類したものを言う。そしてこの「経・律・論」の三蔵を翻訳した高僧のことを三蔵法師と呼ぶのである。

その三蔵法師の中で最も著名な、そして『西遊記』のモデルともなった玄奘（げんじょう）は、唐の貞観3（629）年冬に長安を出発し、西域の諸国を巡めぐって印度にまで至り、多くの仏像や經典を携えて長安に戻り、その後多くの訳経を行ったと伝えられている。当初、玄奘は何人かの同志と印度への歴遊を望んだが、当時の唐王朝はこれを許さなかった。仲間たちが一人二人と去るなか、当時二十八歳の若き玄奘は、ただ一人禁令を犯してまで印度へ向かったのである。過酷な自然を乗り越切る肉体的な強さは言うまでもないことだが、むしろそこまで玄奘を駆り立てた「求法（ぐほう）の思い」と強靱な精神力にこそ、われわれは驚愕を感じずにはいられない。

そして彼がもたらした、訳出した数々の典籍（てんせき）、それこそはとりもおさず「三蔵」であったのだが、この玄奘の訳出した「三蔵」こそは、後の人々の求法の道しるべともなったのである。現在も玄奘の訳出した「三蔵」の多くは、大蔵経（だいぞうきよう）などによってわれわれも眼にすることができ。言ってみるなら「三蔵法師」という呼び名は、単なる訳経僧ではなく、自らも求法に精神に溢れ、人々にもその依るべき手がかりを示した玄奘にこそ最もふさわしいものである。そう考えると「三蔵法師」玄奘と、人々が思うのも納得できよう。玄奘と、そして「三蔵」の典籍に込められた求法精神は、ぜひ後世へと受け継いでゆきたいものである。

佐藤義寛 大谷大学助教授・中国文学

聞法会
永代経法要

9月28日
10月24日

（月）午後1時～午後3時迄
（土）午後1時半～午後4時

お参りをお待ちしております

涅槃堂永代経納骨・墓地・見学受付中

